【CEATEC22022】パネルディスカッション「ロボットのいる未来のイエ」レポート

10 月 18 日から 21 日までの 4 日間、幕張メッセにおいて、IT やエレクトロニクス機器などの総合展示会「CEATEC 2022」が開催された。コロナ禍を経て、3 年ぶりにリアル会場での実施。世界各国から 500 以上の企業が参加し、来場者は 8 万人を超えた。期間中は各業界のトップランナーによるセッションが催されるなか、Connected Home Alliance（以下、CHA）からも登壇があった。本稿では「ロボットのいる未来のイエ」のタイトルのもと行われた同セッションについて紹介する。

壇上に上がったのは、松井龍哉氏（Connected Home Alliance デザインディレクター、フラワー・ロボティクス株式会社代表）、清水宏之氏（Connected Home Alliance 元理事、株式会社 MaaS Tech Japan 取締役 CSO プロダクト開発統括）、信濃義朗氏（Connected Home Alliance メンバー、MIRAIBAR 株式会社マーケティング シニアマネージャー）。モデレーターは、Potage 株式会社の河原あずさ氏が務めた。

優しいロボットがいる家

松井氏は、長年ロボットデザイナーとして活動してきており、今までの活動を網羅的にまとめた書籍『優しいロボット』を昨年上梓したばかりだ。セッション冒頭、松井氏は、そのタイトルにもなっている「優しいロボット」の概念について説明を行った。

「今後、ロボットがいる社会とはどのようなものになっていくのか。そんなことを考えた時に、日本が向かうべき未来は、20 世紀のように安くて効率の良いものを大量生産するだけでなく、こ

れからは一人一人に合ったプロダクト、クオリティの良いものを作る必要があると思う。昨日よりも今日が楽しくなっている、そんな社会をロボット作りを通して目指していきたい。“人間”のことを良く考えた社会にするべく、ロボットは人間に何ができるのか。そこの一つのキーワードに“優しさ”があると思う」と力強く語った松井氏。

つまり今後は、今まで利益優先で作ってきたものづくりの方法ではなく、カインドネスから考えていくプロダクトを作る必要があるのではないか。松井氏がそう問いかけるところから議論の幕が開けた。

Z 世代が考えるロボットのある家とは

CHA では、日々企業間で連携・議論がなされているが、その中で若い世代の意見が聞きたいという声が大きくなってきた。そこで、CHA は「Q-reation×Robotics アイデアソン～ロボットと人が共存する未来のイエの姿とは？～」と題した学生向けのワークショップを 9 月に開催。イベント内でビジネスアイデアコンテストも行った。その経緯を紹介しつつ、実際に最優秀賞に選ばれた Z 世代によるプレゼンが、その後行われた。

受賞したのは、東急株式会社、東日本旅客鉄道株式会社（JR 東日本）、東京地下鉄株式会社（東京メトロ）が共同出資した渋谷スクランブルスクエア株式会社が運営する会員制の産業交流施設「SHIBUYA QWS（渋谷キューズ）」の 12 期生に所属する高校 2 年生のれいんぼー*さんと大学生のみい*さんだ。（*れいんぼーさんとみいさんは、いずれも SNS 上のハンドルネーム）

プレゼンしたのは「サメハウス」。れいんぼーさんが大のサメ好きということで、サメロボットが執事として常駐している家を構想した。サメロボットは、内蔵された体内パッチから、所有者

の感情・気分・体調を図ってそれに対応した行動を行う。また、住宅と連動した IoT 機器として、照明の調整・空調・BGM もサメロボットを介して行うことが可能だ。

サメロボットの意義について、れいんぼーさんは「大好きなサメがいることで、心理的安全性が高まり、自宅時間が充実する。また、一人暮らしでは悲しいことがあった時に、一人で過ごすのはつらいが、サメロボットがいることでその気持ちを軽減できる」と話した。

授賞理由について、松井氏は「企業に入って製品開発に携わっていくと、どうしても製品を売ること、マーケティングを重視したものづくりになってしまう。そんな中、サメハウスは、自分が欲しいものをそのままアイデアにつなげているのが非常に素晴らしい。住宅の中で使用するシナリオもよくできていた」と説明した。

清水氏も「どうしてもロボットというとヒト型を想像してしまうところを、サメ型にしたのが面白いと思った。また、訪ねてきた人に対しても何かプラスのものを与えられるので、家の中だけでなく、外に開いているアイデアというのも秀逸だと感じた」と感想を述べた。

信濃氏は「欧米では、ロボットは人類に反抗して世界が滅ぼされるというシナリオの本や映画などが多いが、日本は鉄腕アトムやアラレちゃんなど、ロボットが人間のパートナーになることが多いように感じる。サメハウスもそうした日本的な考え方が根底にありつつ、自分の“好き”という気持ちを最大限に表現していることに好感を覚えた」と述べた。

今後のロボットは自分に合ったカスタマイズが必要

また、松井氏は「サメハウス」に対して「ハグすることでユーザーの健康データを取得するアイデアもよかった。どうしても、データを取得する際、人間なので記入することを失念してしまう日などがある。しかし、このサメロボットは好きな人が所有するため、1 日 1 回はハグすることで、正確なデータが取れそう。デバイスとしても優秀だ」と評価した。

加えて、ほかのワークショップ参加者のアイデアも紹介。「家の中に自走式のロボットを置く」「家の中のモノがロボットになる」「家自体がロボットになる」など内容は大きく 3 つに分類できたという。

最後に「ワークショップを通じて、今後のロボット作りにどのようなヒントが得られたか」と投げかけた河原氏。これを受けて、松井氏は俯瞰した目線で未来を見据える。「ワークショップに参加した学生たちは、ロボットが人間の隣に普通にいる存在として捉えていたことが非常に良かった。これからの産業界を考えていくと、企業がたくさんの製品を作って売るという時代から、企業は OS のようなベースとなるモノを作り、それを一人一人に合ったカスタマイズを施していくことが重要になってくる」。ロボット製作者のセンスは常にアップデートが必要であるとしてディスカッションは結ばれた。